

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04272

研究課題名（和文）社会的文脈における説明バイアスとその抑制

研究課題名（英文）Explanation Bias in social context and inhibition of it's emergence

研究代表者

宮本 聡介（Miyamoto, Sousuke）

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：60292504

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：説明バイアスとは、説明経験によって説明者自身の説明対象に対する認知が歪むことである。本現象がバイアスである以上、そのバイアスを抑制することが求められる。本研究プロジェクトの主目的はここにある。本研究プロジェクト実施期間に実施した計4つの実験から、説明バイアス現象は繰り返し確認された。説明バイアスの抑制効果については、対立説明の影響を要因として実験を行った。実験の結果、対立説明はバイアスの解消を導くわけではないことが示され、説明バイアスの抑制が容易なことではないことが示唆された。説明バイアスについて、社会・教育心理学的視点からの議論が行われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

説明バイアスについては、1980年代からその影響が報告されている。説明経験によって説明対象に対する認知が歪んでしまうという現象は、日常場面に様々な影響を及ぼす。単なる噂が、伝達される際に生じる説明経験によってリアリティを増幅させる、科学的立証性を持たない健康行動もその効果の説明を繰り返すと健康に良いと感じられるようになるなど、説明バイアスは身近にあり、その社会的影響は大きいと考えられる。本プロジェクト中で実施した研究から説明バイアス現象は繰り返し観察されている。一方、説明バイアスを抑制することが容易でないことも示唆された。今後このバイアスをどのように抑制できるかさらなる検証が必要である。

研究成果の概要（英文）： In this study, we call the phenomenon that explanation itself affects explainer's cognition toward the explained thing as "explanation bias. Because explanation bias is the BIAS, it should be inhibited. Main purpose of this study project is to inhibit emergence of explanation bias. We conducted four experimental studies in the period of this study project and our line of research showed the phenomenon of explanation bias repeatedly. Inhibition of explanation bias was examined by manipulating counter-explanation factor. Results showed that counter-explanation did not inhibit explanation bias. The research implicated that it is not easy to eliminate explanation bias. The influence of explanation bias is discussed from social and educational psychological point of view.

研究分野：社会心理学

キーワード：説明 認知の歪み バイアスの抑制

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1970 年台後半から、説明行為が説明対象の認知を歪める現象が報告されている。この現象を“説明バイアス”と言う(Koehler,1991)。認知心理学の領域では、ある事象の将来の予想(仮説)の理由を説明すると、その事象の生起率の予測値とその確信度が高まること示されている。敵対する 2 つのアメリカンフットボールチームの次の試合での勝利の予想(Sherman, Zehner, Johnson & Hirt,1983)、大統領選挙の結果の予想(Carroll, 1978)、テストの成績のような自己のパフォーマンスの予想(Campbell & Fairey, 1985)において、説明経験を伴った説明対象の将来の生起確率を高く認知し、その予想を確信するなどである。

社会心理学の領域では、信念固執効果(Ross, Lepper & Hubbard ,1975; Lepper, Ross, Lau, 1986)を高める要因の 1 つとしてとして、説明変数が操作されている。信念固執効果とは、人は一旦植えつけられた信念に固執し、なかなかその信念を拭い去ることができない効果をいう。さらに説明経験があると信念固執効果が強く生じることが明らかにされている(Ross, Lepper, Strack, Steinmetz,1977; Anderson, Lepper & Ross, 1980, Anderson & Sechler ,1986)。

会計学の分野でも、説明バイアスの影響に着目した研究がいくつかある。会計監査場面では、会計データの予期せぬ変動の原因を報告書にまとめるという形で説明すると、その説明内容と同様のことは、将来再び起こりやすくなると判断される説明バイアスが報告されている。予期せぬ変動の理由は、会計監査の対象となった組織から提出されることが多いため、バイアスに気づかないと、組織レベルの不正など真の原因を突き止められなくなる可能性がある (Koonce,1992)。

これらの研究例は、いずれも将来どの程度当該事象が発生する可能性があるかを予想させる形でバイアスを測定していた。これに対し近年、宮本・菅・太幡(2015)では、現在の事象の評価においても説明バイアスが生じることが示されている。この研究では、架空の心理用語の意味説明を求め、その後、その用語の実在性を評定させると、意味説明を求めなかった架空の心理用語よりも、意味説明を求めた架空の心理用語の実在性を高く認知することが示された。トラブルの原因を外的・内的要因に帰属させ、その理由を説明させる実験でも、説明した方向に帰属が歪むことが示されている(宮本, 2015)。

### 2. 研究の目的

現実場面では、説明行為に社会的文脈が伴う。したがって、社会性の高い文脈での説明バイアスの影響とメカニズムを明らかにすることは、社会心理学的な観点から有用性が高いと考える。本研究の第 1 の目的は社会的文脈の中での説明バイアス現象のメカニズムを明らかにすることである。説明バイアスがバイアスである以上、それを抑制・緩和することが必要となると考えられる。先述の会計場面でのバイアス(Koonce, 1992)はその一例である。Anderson と Sechler(1986)や Koonce(1992)の研究では、初期態度を形成させるための情報提示場面で、提示情報と同方向の説明(explanation)と同時に、反論(counter-explanation)も経験すると、説明バイアスが解消されることが示されている。本研究では、説明バイアスの緩和・抑制に焦点を当て、これを実現するメカニズムを認知・社会レベルの諸要因から明らかにすることを第 2 の目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 先行研究の精査

説明バイアス現象を直接扱った先行研究の整理はほぼ終わっている。しかし、他の研究領域において説明バイアス現象を間接的に扱ったものが未だあるかもしれない。社会心理学以外の他領域、また、心理学以外の他領域についても視野を広げ、説明バイアスに関連する現象に言及した研究があるかどうか、探索的に検討を行った。

#### (2) 実証研究

社会的文脈における説明バイアスの影響を検証するため、主に実験室実験と実験的調査法の 2 手法をもちいて実証研究を行った。以下に報告する 4 つの研究のうち、研究 1・2 は太幡が研究の立案および実験を実施した。研究 3 は菅が研究の立案および実験を実施した。研究 4 は宮本が研究の立案および実験を実施した。最終的な研究の総括は宮本が行った。

### 4. 研究成果

#### 研究 1 大学に関する説明行為が大学への説明者自身の評価に与える影響

説明行為が説明者自身にもたらす再帰的影響は、説明対象となった社会的事象への態度にもみられる可能性が考えられる。そこで、本研究では、社会的事象に対する態度として大学生の所属大学への評価を取り上げ、以下の二点を検証することを目的とした。

- (a) 大学に関する説明行為が大学への説明者自身の評価に影響を与えるか否か
- (b) 説明の上手さの自己評価が大学への説明者自身の評価に影響を与えるか否か

併せて、所属大学への同一視の個人差が、大学への説明者自身の評価に対する、説明行為の効果、説明の上手さの自己評価の効果に影響する可能性についても検証した。

#### 方法

**参加者** 私立A大学の学生110名に実施した。回答に不備のある者などを除き、103名(男性60名、女性43名、平均年齢19.82歳( $SD=1.17$ ))を分析対象とした。

**手続き** “所属大学への意識に関する調査”と称し、2回の調査を実施した。1回目(説明前)は、大学への評価、所属大学への同一視を尋ねた。2回目(説明後、1回目の約1か月後)は、オープンキャンパスでA大学に来た高校生に、A大学の特徴を説明する場面を想像させ、セリフ形式で説明を書くように教示した(5分)。その後、説明の上手さの自己評価、大学への評価を尋ねた。

**測度** すべて7件法で尋ねた。得点が高いほど、肯定的に評価していること、当てはまることを示す。(a)大学への評価:ステレオタイプ内容モデル(Fiske, Cuddy, Glick & Xu, 2002)に基づき、能力(“有能ではない” “有能な”など3項目;  $r=.84, .88$ )と温かさ(“親しみにくい” “親しみやすい”など3項目;  $r=.69, .73$ )について、一般的なA大学の学生が持っていると思う印象を尋ねた。また、大学の印象(“魅力的ではない” “魅力的な”など7項目;  $r=.92, .93$ )を尋ねた。(b)説明の上手さ:先行研究(e.g., 菅他, 2012)の2項目を尋ねた( $r=.86, p<.001$ )。(c)所属大学への同一視:集団同一視尺度(Karasawa, 1991)の7項目を尋ねた( $r=.71$ )。

#### 結果と考察

説明行為の説明者自身の評価に対する影響を検証するため、大学への評価に関する指標の得点を説明前後で比較した(Table 1)。能力は、説明後に印象が高くなった( $t(102)=2.03, p<.05, d_D=0.20$ )。

続いて、説明の上手さの自己評価と同一視の説明者自身の評価に対する影響を検証するため、大学への評価に関する指標の“説明後 説明前”の得点を目的変数、説明の上手さの自己評価( $M=3.83, SD=1.45$ )、所属大学への同一視( $M=3.44, SD=0.96$ )、交互作用項を説明変数とする重回帰分析(強制投入法)を行った。主な結果は以下の二点である。(a)集団同一視が低い者ほど、説明によって能力、温かさの印象が高くなった( $s=-.21, -.28, p<.05$ )。(b)能力は、交互作用項と有意な関連がみられた( $r=-.20, p<.05$ )。集団同一視の低い者のみ、説明の上手さの自己評価が高いほど、能力の印象が高くなった( $r=.29, p<.05$ )。

以上の結果は、説明の再帰的影響は、社会的事象に対する態度にもみられることを示唆するものである。また、特に説明行為の効果は同一視の低い者に顕著にみられたことから、説明行為の再帰的影響は、態度が確立していない事象にみられやすいと推察される。

**Table 1**  
大学への評価に関する指標の  
平均値(標準偏差)とt値

	説明前	説明後	t値	$d_D$
能力	3.43 (0.89)	3.61 (0.94)	2.03*	0.20
温かさ	4.19 (0.89)	4.20 (0.92)	0.19	0.02
印象	4.44 (1.08)	4.37 (1.10)	1.33	0.13

\* $p<.05$

#### 研究2 大学に関する説明行為が大学への説明者自身の評価に与える影響(2) 説明の有無の比較

本研究では、大学に関する説明行為が大学への説明者自身の評価に影響を与えるか否かを再検証する。研究1の追試を、所属大学について説明する条件としない条件を設けて実施した。

#### 方法

**参加者** 私立M大学の学生295名に実施した。回答に不備のある者などを除き、275名(男性78名、女性195名、不明2名、平均年齢20.21歳( $SD=1.14$ ))を分析対象とした。

**実験計画** 所属大学に関する説明(あり、なし)×時期(説明前、説明後)の混合計画であった。オープンキャンパスでM大学に来た高校生に、セリフ形式で書く説明内容を操作した。説明あり条件の実験参加者179名には、太幡他(2017)と同様に、M大学の特徴の説明を書くように教示した。なし条件の実験参加者96名には、大学生の一般的アルバイトの説明を書くように教示した。

**手続き** 2回の調査を実施した。1回目(説明前)は、大学への評価、所属大学への同一視を尋ねた。2回目(説明後、1回目の約1か月後)は、説明させた後、説明の上手さの自己評価、大学への評価を尋ねた。

**測度** 研究1と同様の項目を、すべて7件法で尋ねた。得点が高いほど、肯定的に評価していること、当てはまることを示す。(a)大学への評価:一般的なM大学の学生が持っていると思う印象として、能力3項目( $r=.86, .87$ )、温かさ3項目( $r=.73, .74$ )を尋ねた。また、大学の印象7項目を尋ねた( $r=.91, .93$ )。(b)説明の上手さ:2項目を尋ねた( $r=.85, p<.001$ )。

(c) 所属大学への同一視：集団同一視尺度 (Karasawa, 1991) の 7 項目を尋ねた ( $r = .78$ )

結果と考察

**Table 2**  
大学への評価に関する指標の  
平均値 (標準偏差)

	説明あり		説明なし	
	説明前	説明後	説明前	説明後
能力	4.03 (0.86)	4.11 (0.96)	4.28 (1.02)	4.25 (0.97)
温かさ	4.56 (0.86)	4.75 (0.81)	4.88 (0.90)	4.82 (0.84)
印象	4.72 (0.86)	4.62 (0.92)	4.91 (0.94)	4.87 (1.05)

説明行為の説明者自身の評価に対する影響を検証するため、大学への評価に関する指標の得点を条件間で比較した (Table 2)。温かさは、交互作用がみられた ( $F(1, 273)=7.35, p < .01, \eta^2 = .03$ )。あり条件のみ、説明後に印象が高くなった ( $F(1, 273)=12.44, p < .001, d = 0.24$ )。続いて、説明の上手さの自己評価と同一視の説明者自身の評価に対する影響を検証するため、大学への評価に関する指標の“説明後 説明前”の得点を目的変数、実験条件 (説明あり=1、なし=0) 説明の上手さの自己評価 ( $M=3.80, SD=1.32$ ) 所属大学への同一視 ( $M=3.86, SD=0.95$ ) 交互作用項を説明変数とする重回帰分析(強制投入法)を行った。

その結果、いずれの説明変数とも、大学への評価に関する指標とは関連がみられなかった。本研究の結果でも、説明の再帰的影響は、社会的事象に対する態度にもみられることが示唆された。

研究 3 事件の原因に関する説明が容疑者に対する判断に及ぼす影響

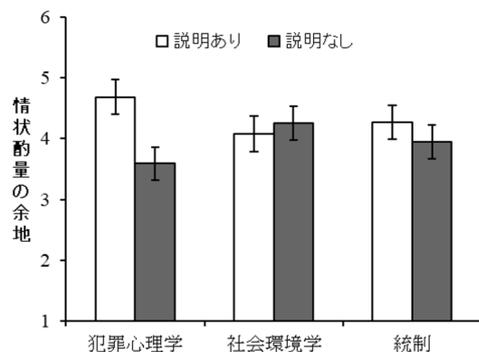
本研究では、事件の原因を説明すること自体が、その後の判断にどのような影響を及ぼすかを検証することを目的とする。事件の原因を説明した参加者は、説明をしない参加者に比べて、外的要因を事件の原因・理由であると高く判断すると予測される (仮説 1)。また、説明を通して外的要因の影響を考慮することで、情状酌量の余地を高く判断することも予測される (仮説 2)。

方法

参加者：327 名 (女性 154 名、男性 170 名、不明 3 名、平均年齢 19.78 歳)

実験計画：2 (説明：なし/あり) × 3 (調査主体：社会環境学研究室/犯罪心理学研究室/研究室名なし) いずれも参加者間要因

手続き：2 つの異なる心理学の講義において、質問紙を配付することによって、実験を実施した。1 つの講義の受講者を説明なし条件、もう 1 つの講義の受講者を説明あり条件に割り当てた。また、質問紙の表紙に科学警察研究所「犯罪心理学研究室」あるいは「社会環境学研究室」と記載することによって、調査主体を操作した。統制条件の質問紙には科学警察研究所のみ (研究室名なし) を記載した。事件報道に関する調査と称し、ある架空の事件についての報道記事を提示し、判断を求めた。説明なし条件では、報道記事を 3 分間読み、原因の所在や情状酌量の程度に関する質問に回答するよう求めた。説明をする条件の参加者には、報道記事を読んだ後、犯人が犯行に至った原因・理由を考えて自分の言葉で説明するよう求めた。それ以外の手続きは、説明をしない条件と同じであった。

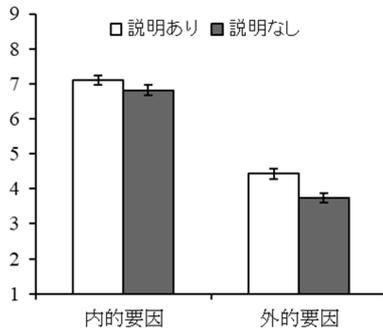


従属変数：原因の所在：容疑者が罪を犯した原因・理由として内的要因 4 項目 (幼少時代のいじめ、精神状態の不安定さ、社会に対する恨み、世間の注目を集めなかった)、外的要因 2 項目 (治安の悪さ、人間関係の希薄さ) それぞれがどの程度相当するか (内的・外的それぞれについて参加者ごとに平均値を算出した値を分析に使用) 1. 全く相当しない~9. 非常に相当する、情状酌量の余地：事件の容疑者に、情状酌量の余地はあると思うか 1. 全くない~9. 非常にある。

図 1. 原因の所在に関する判断の平均値 (エラーバーは標準誤差)

結果

【原因の所在】2 (説明：なし/あり) × 3 (調査主体：犯罪心理学研究室/社会環境学研究室/研究室名なし) × 2 (原因の所在：内的/外的) の 3 要因混合分散分析を行った (最後のみ参加者内要因)。説明の主効果 ( $F(1, 320) = 8.79, p = .003$ )、原因の所在の主効果 ( $F(1, 320) = 591.18, p < .001$ ) が有意であり、説明 × 原因の所在の交互作用に有意傾向 ( $F(1, 320) = 2.84, p = .093$ ) が認められた。下位検定の結果、説明あり条件の参加者は説明なし条件の参加者に比べて、外的要因を事件の原因・理由に相当すると判断する程度が高いことが示された (図 1)。内的要因については説明の有無で判断に差はなかった。よって、仮説 1 は支持された。



【情状酌量の余地】2 (説明：なし/あり) × 3 (調査主体：犯罪心理学研究室/社会環境学研究室/研究室名なし) の参加者間要因分散分析を行った。説明の有無の主効果 ( $F(1, 320) = 3.27, p = .071$ ) と、説明 × 調査主体の交互作用 ( $F(1, 320) = 2.56, p = .079$ ) にいずれも有意傾向が認められた。下位検定の結果、調査主体が犯罪心理学研究室であった条件においてのみ、説明あり条件の参加者は、説明なし条件の参加者に比べ、情状酌量の余地を高く判断する傾向が見られた (図2)。よって、犯罪心理学条件においてのみ仮説2が支持された。

図2. 情状酌量の余地に関する判断の平均値 (エラーバーは標準誤差)

#### 研究4 繰り返し説明と反論説明が説明バイアスに及ぼす影響

本研究では、繰り返し説明が説明バイアスを強めるか、また反論説明がそれ以前に行った説明によって生じる説明バイアスを弱めるかの2点に焦点を当て、健康・不健康志向を説明題材に用いて実験を行った。

#### 方法

実験参加者：大学生56名(男性7名、女性49名)を健康-不健康説明条件・不健康-健康説明条件にランダムに割り当てた。

手続き：実験では健康志向とはどのようなことか、不健康志向とはどのようなことかを実験参加者に説明するよう求めた。説明内容とその順序によって、健康-不健康説明条件・不健康-健康説明条件の2つの群に大別できる。ここでは健康-不健康説明条件の実験手順について説明する。

始めに実験参加者は、自身の食生活や運動習慣に関する質問(健康志向質問)に6件法回答した。次に参加者は「健康」と聞いて思いつく単語をできるだけたくさん書き出すよう求められた。その後、一般的に健康だと言われていることを取り上げ、なぜそれが健康に良いのか説明してくださいと教示し、説明課題を行った。その後、再び健康志向質問への回答を求めた。健康イメージ回想課題・説明課題・健康志向質問をワンセットとし、これを2セット行った。次に3セット目では、不健康をテーマとした課題に置き換え、課題に取り組むよう求めた。すなわち健康-不健康説明条件では、健康をテーマとした説明課題を2度行い、その後不健康をテーマとした課題を1度行った。健康志向質問は同一の内容の質問を繰り返し4回おこなった。

不健康-健康説明条件は、不健康をテーマとした回想・説明課題を2度行い、その後健康をテーマとした回想・説明課題を行った。健康志向質問は健康-不健康説明条件と同様に4回行った。

実験デザイン 説明内容((健康-不健康志向群・不健康-健康志向群) × 説明回数(0回目・1回目・2回目・3回目)の2要因混合計画であった。

#### 結果と考察

健康志向質問の中から「栄養のバランスがあるものを摂ろうと思いますか」「生活習慣について気をつけたいと思いますか」の2項目を足し上げて2で除したものを健康意識尺度とし(2項目間の相関は  $r = .56$ )、説明内容 × 説明回数の2要因混合計画による分散分析を行った。図3は各条件の平均値をグラフにしたものである。分析の結果、説明回数の主効果が有意だった ( $F(3, 159) = 19.21, p < .001$ )。多重比較(Bonferroni)の結果、説明前(0回目)に比べて説明2回目、反論説明(3回目)の後に有意に健康意識が高まっていることが示された。この傾向は2つの条件を別々に分析した場合でもほぼ同様の結果であった。このことから、健康行動について説明した場合、繰り返し説明によって健康意識が上昇することが示され、説明バイアスが確認された。しかし3回目の反論説明後にはさらに健康意識が上昇する結果となり、説明バイアスの抑制は確認されなかった。不健康行動について説明した場合にも、健康意識は上昇した。このことから、説明バイアス現象は追試できたものの、反論説明によるバイアス抑制は確認できなかった。

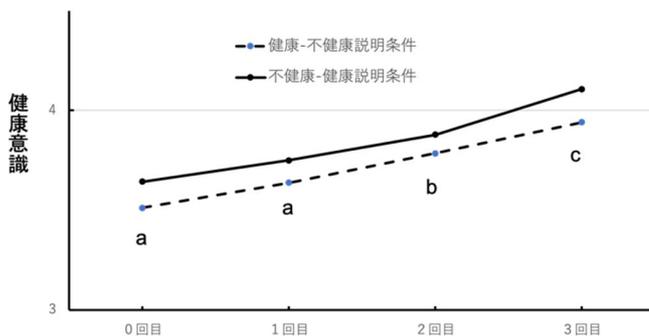


図3 説明条件別に見た健康意識の変化

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菅さやか・宮本聡介・太幡直也
2. 発表標題 説明経験が説明対象の実在性認知に与える影響 2
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太幡直也・菅さやか・宮本聡介
2. 発表標題 大学に関する説明行為が大学への説明者自身の評価に与える影響（1）
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本聡介・太幡直也・菅さやか
2. 発表標題 大学に関する説明行為が大学への説明者自身の評価に与える影響（2） 説明の有無の比較
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅さやか・太幡直也・宮本聡介
2. 発表標題 調査主体の属性に応じた質問紙への回答が回答者自身の判断に与える影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sousuke Miyamoto
2. 発表標題 Explaining is believing: Causal Attribution of accident and Explanation bias
3. 学会等名 International Conference of Psychology
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	太幡 直也 (Tabata Naoya)  (00553786)	愛知学院大学・総合政策学部・准教授  (33902)	
研究分担者	児玉 さやか(菅さやか) (Kodama Sayaka)  (30584403)	慶應義塾大学・文学部(三田)・助教  (32612)	